進藤家の人々

れおまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
進藤家の人々

【Ｎコード】
Ｎ０４６０Ｚ

【作者名】
れおまる

【あらすじ】
【山場とオチと意味】

・この小説に無いもの

１・巽の朝（前書き）

人物紹介

進藤紅音（あかね）…２２歳Ｏ型。長女。ラーメン屋の店員。物事を細かく考えるのが苦手。

進藤蒼太（そうた）…２０歳大２Ａ型。長男。穏やかで几帳面。酒に弱い。

進藤巽（たつみ）…１７歳高２Ｂ型。次男。一応本作品の主人公。上と下に挟まれ気苦労が絶えない。

進藤みどり…１６歳高１ＡＢ型。次女。口数が少なく心配性。

進藤黄児（こうじ）…１０歳小４Ｏ型。三男。脳天気で考えるのが苦手。食べることが大好き。

進藤銀太郎（ぎんたろう）…４８歳ＡＢ型。進藤家五人兄弟の父親にして柱。小説家で書斎に籠もっているので、出番はそれなり。

進藤輝子（てるこ）…４６歳Ｂ型。進藤家五人兄弟の母親にしてもう一本の柱。お喋りするのが好き。

1・巽の朝

目を覚ますとまだ7時前だった。
そして、俺が起きた瞬間に目覚まし時計が喚きだしたので、手刀で黙らせる。

「ふっふっふっ・・・勝ったぞ！」

ずっと連敗し続けだったが、遂に白星を勝ち取ったんだ。
間違いない、今日は必ず良いことがあるぞ！

朝っぱらから満面の笑顔で制服に着替えて自分の部屋を出た。

「うわっ？！」

階段を降りようとしたら何かに躓いてしまい、体勢を崩してしまった。
目の前には1階へと続く無情な道が広がっている。
落ちたら無事では済まないと思い必死で体勢を立て直すが、寝起きでまだ覚醒していない体は言う事を聞かなかった。

「うわ～～～～～～～～～っっ！！」

そのまま階段を転がり、顔面から無事に着地した。
いや、無事じゃなくて無様というべきか。

やっぱり俺の勘というのは頼りにならないなぁ・・・

「ふぁああ・・・お、巽。派手にやったな」

階段の上で足を投げ出して寝ていた姉ちゃんが、欠伸混じりに話し掛けてくる。
・・・あんたの仕業か、俺が躓いたのは。

「寝るなら布団で寝ろって言ってるだろ！」
「あっはっはっ、悪いね。疲れちゃって部屋に戻るの面倒でさぁ～」

悪怯れる様子も無く寝癖でぼさぼさになった髪をかきながら笑っている姉ちゃん。

進藤紅音（あかね）
5人兄弟の長女にして唯一の社会人だ。
とにかく大雑把で適当で、あと大雑把。
俺は大雑把という単語を見付けると心の中で姉ちゃんと呼ぶ。
基本的に5分以上難しい事を考えると頭がショートしてしまう、思案という言葉とは無縁の姉上である。
酷い目に遭わされたものの、よく見なかった俺も悪いのでそれ以上は何も言わなかった。
「朝から騒がしいわね巽」
「あ、おはよう母さん」
「今日は早いのね。丁度ご飯出来たところだから食べなさい」
「うん」

ちょっとしたアクシデントはあったものの、出来たての食事は美味しいのでやっぱりついてる。
5つ並んだ椅子の真ん中に座って、両手を合わせた。俺の場所はいつもここだ。
湯気がたっているハムエッグをひとかけら口に入れたところで、姉ちゃんと兄貴が降りてくる。

「おはよう、兄貴」
「おう。どうした巽、おでこに痣が出来てるぞ」
「ちょっとね・・・」

言葉を濁しつつ姉ちゃんを睨むと、原因を察したのか兄貴は呆れた様に笑った。

進藤蒼太(そうた)
5人兄弟の2番目で長男、今年で大学2年生になる。
それなりには喋るけどあまり口うるさくは無くて、几帳面で頼りになるのだ。
姉ちゃんですら頼りにするくらいなので、ある意味5人兄弟のトップといってもいい。

姉ちゃんは左端、兄貴はその隣に座る。5つある椅子のそれぞれの位置だ。
別に誰がどこだと決めた訳じゃなくて、小さな頃から我が家ではこれが当たり前だった。

「おはよう、みどり」

えっ、みどり？
兄貴の言葉に首を傾げながら右に振り向くと、既にみどりが座っていた。

「お前いつからいたんだ？」
「・・・ついさっき」

みどりは目線を動かさずに答える。

よく気付いたな、兄貴。いつからいたのかさっぱり気付かなかったのに・・・

進藤みどり
5人兄弟の4番目で次女、今年で高校に入学した。
兄弟の中では一番無口で表情もあまり変わらない。特技は気配を消すこと、らしいが・・・

「腹へった〜〜〜!!」

みどりとは対照的に、あいつが朝から大きな声を上げながら階段を掛け降りてきた。
どすんどすんと床を響かせ、空いていた最後の右端の椅子に座る。

「あかねぇ、そうにぃ、たつにぃ、みどねぇ、おはよう!!」
「ママが抜けてるわよ、黄児。元気がいいわね」
「そうだった!!おはよう母ちゃん!!」

進藤黄児(こうじ)
5人兄弟の5番目で3男、今年で小学4年生になる。
元気いっぱいで一番うるさい、進藤家の太陽みたいな存在だ。
食いしん坊でコロコロに太っている。
素直で純粋なので、家族で一番愛されているかもしれない。
だから、屈託の無さを持ったまま大きくなると姉ちゃんみたいにならないか心配だ・・・

「行ってきまーす」
「ご馳走様。じゃあ母さん、行って来るね」

姉ちゃんと兄貴が早々と食事を済ませて家を出ていった。
俺とみどり、黄児とは違って出勤及び通学に時間がかかるから仕方

ないのだ。

「・・・・・・ついてる」

「おいしいよこれ！！みどねぇちょうだい！！」

口のまわりに食べかすをいっぱい付けて朝食を頬張っている黄児。みどりに世話を焼かれているにも関わらず、食べかけのハムエッグを奪った。

まったく食い意地の張った奴だな。自分のだけじゃなく、姉ちゃんのまで奪うなんて・・・

困った奴だが、黄児の旨そうに食べる顔を見ていると何だか癒されてしまう。

「やばい、もう時間だ」

「黄児・・・」

「まだ腹一杯になってないぞ！！」

「どんだけ食うんだよ。それくらいにしとけ」

時計は８時１０分前を指している。もう行く時間だ。

どんぶりに３杯目のおかわりをよそおうとする黄児を、みどりと２人がかりで玄関まで運んだ。

「じゃあ行って来る、母さん」

「気をつけてねー」

父さんは今日も書斎に籠もったままか。

ちゃんと仕事をしているって事だから、喜ぶべきだな。

普通のサラリーマンなら説教しなきゃならない反社会的な行為だけど。

高校は隣駅にあり、歩いて通える距離だった。俺とみどりはそこに通っている。

「・・・・・・・・・」

特に自分から話し掛けてこず、みどりはただ黙々と歩いていた。
別に今朝に限った事ではなくていつもこんな感じだ。
姉ちゃんや黄児並みに喋ったら明らかにおかしい。
もしそうなった暁には何かが憑依したとみて目の色を確認するべきだな。
歪んだ形で願いを叶えようとする、実体を持たない異形の存在の仕業に違いない・・・

「・・・・・・お兄ちゃん」
「なっ、なんだ?!」

軽い妄想に耽っていたところを呼び掛けられ、不審な声を出してしまう。

「危ない・・・・・・」

みどりの言葉の直後、俺の体に凄まじい衝撃が襲い掛かった。
すぐ傍にあった壁に激突してしまう。

「ぐほぉぉぉぉ!!」
「いたいた、探したよみどり。はいこれ」
「・・・・・・後でいいって言ったのに」

俺を跳ねた真っ赤な車から出てきたのは、クソ野郎ことお姉様だっ

たのです。
で、あろう事か相手を無視してＤＶＤをみどりに渡しています。

「じゃあね、みどり」
「遅刻しないでね・・・」
「おい待て！！せめてごめんくらい言えや！！」
「ん？あ、いたの巽。さっさと学校行きなさい。学生の内から遅刻してるんじゃ社会でやってけないわよ」
「轢き逃げして悪怯れないなら社会人どころか人間として失格だろうが！！」

しかし姉ちゃんは無視して走り去ってしまった。

「お兄ちゃんは強いね、車にひかれても痣だけで済むから」
「・・・ま、慣れてるからな」

慣れたくはないけれど、実はこういう目に遭うのは初めてじゃない。今年だけでももう５回目だな。いずれもあの素晴らしいお姉様が加害者だ。
まったく悪気が無いのがもう、物凄い腹立つ。いくら姉であっても許せないね。

おかげで体が鍛えられてるけど、絶対に感謝なんかしないからな。

「あ、学校・・・」

校舎が見えてきた。
なんだ、結局今朝も代わり映えがしなかったじゃないか。

こんな感じで、俺の1日が始まるのだ。

〜〜続く〜〜

2・みどりの好きな物

基本的に妹のみどりは少食である。
うちの兄弟はわりとよく食べる方で、特に黄児は大好きなカレーは４杯おかわりしないと食べた気がしないと言っている。
だが成長期であるにも関わらず、みどりはあまり食べない。

母さんに、黄児と胃袋を交換すればお互いに丁度いい体型になれる、と言われる程だった。

おいしいとも不味いともあまり言わないので、兄貴である俺から見ると食事にあまり拘りが無い様に思える。

「あっ、あれはなんだ？！」
「なんだよ？」
「スキあり！貰ったぜ巽、怪盗ルパン参上！」
「おいこら！！返せ！！」

晩飯時、またしてもお馬鹿な姉上様に奪われてしまう。
それだけでも頭にくるのに、自分の好きな衣サクサクのメンチカツとあれば怒りも激しく湧いてくるというものだ。
まだ黄児であれば怒ったりはしないが、もう働いて何年も経つ大人のやる事かと思うと、悲しくて情けなくなるよ僕は。

「ぬほほほほ、勝利のメンチカツじゃー」
「やめろ！！ソースを浸すな、衣が柔らかくなるだろ！今すぐメンチカツに謝れ！」

お前をソース漬けにしてやろうか、そこの進藤紅音め！！

俺とお前は分かり会えない。揚げ物は衣こそ命、それを自らふにゃふにゃにするとは信じられないぞ！

「人の食い物を取るなこの野蛮人！」

「ねえ蒼太、あんた彼女出来たの？今のうちに遊んどかないと後悔するよ」

「俺を無視すんな！この野郎、こうしてやる！」

お返しにコロッケを奪おうとしたら、箸を落とされてしまった。

「甘いな、坊や。出なおしてこいや、おう？」

今日も騒がしい姉ちゃんと俺をよそに、みどりは黙々と箸を動かしていた。

隣の黄児に食い物を取られても、淡々と「行儀悪いよ」と注意するだけで、全く怒る様子は無い。

黄児であってももしメンチカツを奪うなら、俺は本気で怒ってしまうと思う。

みどりは怒らないだけでちゃんと悪い事は注意するが、もし好きなものを奪われたら怒るのだろうか？

普段の食事でも表情を変えないみどりが好きな物。

それは・・・

「ただいまー」

「お帰り巽。おやつあるわよ」

椅子に座ろうとしたら、すでにみどりがいた。

俺よりも早く帰るなんて珍しいと思ったが、今日は水曜日だから部

活は休みだったな。

「ただいま、みどり」

しかし返事どころか反応も無い。
まあ、みどりは元からそうだな、と思いながら座った。

テーブルに置かれていたのは、葉っぱに包まれたあのスイーツだった。
・・・いや、スイーツって言葉は雰囲気的にちょっと似合わないかな。

みどりは、柏餅を前にしてにこにこと微笑んでいた。
好きな物を前にしてとても嬉しそうにしている。
とは言っても他人が見たら多少口角の角度が吊り上がっている程度にしか見えないかもしれない。
この表情が笑顔だと認識出来るのは、きっと家族か親しい友達だけだろう。

「・・・・・・・・・！」

ようやく俺に気付いたのか、みどりは恥ずかしそうに口元を隠してしまった。
自分でも笑っているという自覚はあるらしい。

「お、お帰りなさい、お兄ちゃん」
「ただいま、みどり」

やっぱり女の子だから甘いものは好きだよな。
でもケーキじゃなくて和菓子ってところが、なんだかみどりらしい。

みどりはそそくさと葉っぱを剥がして、スプーンで柏餅をひとかけら掬った。
ゆっくりと口に運び、更にゆっくりと噛み締めている。
普段はただ食べ物を口に入れているという感じだけど、この時だけは違う。

「・・・・・・・・・」

見るより食べる方が幸せだろうな。
今の表情は他人が見ても嬉しそうだと分かる。
食事は量じゃなくて質、というタイプだ。

見ているとこっちまで幸せな気分になっていく様な気がする。
うちの馬鹿なお姉様も少しくらいは見習ってほしいよな・・・まったく。

〜〜続く〜〜

3・黄児の夢（前書き）

兄弟の中で一番夢があるのは、おそらく黄児だ。

「世界中の国にあるプリン食べたい！」

だとか

「山より大きなコロッケ食べたい！」

だとか

「学校のプールいっぱいに入ってるラーメン食べたい！」

などと、必ず語尾にそれがおれの夢なんだ！と目をきらきら輝かせて言う。

夢を見るのは自由だから、実現出来るかどうかはさておきいかにも子供らしい可愛い夢だ。

「よーしよし、お前は純粋だな黄児ぃ～」

皆に可愛がられる体質の黄児だが、特に姉ちゃんに気に入られている。

大きなお腹を撫でるのが好きらしく、抱きよせながらいつも手でタプタプしていた。

普通、太っている子供は体に触られるのを嫌がるものだけど、黄児は姉ちゃんにだけは許しているらしい。

「もしあかねぇが悪い奴にさらわれたらおれが助けるからな」

「おお、そうか。それは嬉しいね～」

「悪い奴からみんなを守りたい。それがおれの夢なんだ！」

「無理だな。黄児」

「なんでだよたつにぃ！おれは愛と平和を守るヒーローなんだぞ！」

「だって・・・お前の隣にいる奴はとびっきりの悪党だぜ。人の食

い物を盗む、世界一の悪党だ」
「なんだって?!あかねぇは悪い奴だったのか?!」
「これこれ巽君、未来のヒーローに何を吹き込んでいるのかね」
「覚悟しろ!くらえ、タカ!トラ!バッ・・・うわっ!」

興奮してテーブルに上がり、必殺技を繰り出そうとした黄児が勢い余って落ちた。

「おい、大丈夫か?」
「こ、転んでもいいよ、また立ち上がればいい。ただそれだけできれば、英雄さ!」

ヒーロー番組の主題歌の歌詞らしき言葉を口ずさみながら、起き上がった。
偉いぞ、痛いだろうに決してそれを見せようとしないんだからな。

「あんたより打たれ強いかもね、巽」
「うるさいよ怪盗ルパン」
「覚悟しろー!」

まだ立ち向かってくる黄児を宥めながら、姉ちゃんは笑っていた。
日曜日の朝、起きてきたら珍しく姉ちゃんがもうリビングにいた。
どういう風の吹き回しなのかと思ったら、黄児と格闘ゲームで対戦している。

「ちょ、ちょっとあかねぇ、強いって!やりすぎだよ、うわわわわわ!」

黄児の操る力士が、姉ちゃんの操る紅頭巾の女の子に岁でザクザク切り刻まれていた。

はは・・・日曜の朝からこういうスプラッタなものは刺激が強いよな・・・
それにしても、少しは手加減してやれよ。大人のくせして本当にろくなもんじゃねえな、姉ちゃんは。

「どうした黄児。お前の力はその程度か？」
「ずるいぞあかねぇ！おれ、このゲームやった事ほとんど無いのに！」
「こら、師匠と呼べと言ったはずだぞ！修行したいと頭を下げたのは誰だ！」
「うっ・・・そ、それは・・・でもさ、ゲームやってて修行になるの？」
「当たり前さ。凡人にとっては遊びであっても、達人には修行になるのだ」

相変わらず胡散臭い姉上様ですわね。
まあ姉ちゃんの真意なんて知ったことじゃないが、歳の離れた弟と遊んでやるなんて面倒見のいいところもあるのだ。
あまり離れてない俺は散々な扱いだけど・・・・・・

「どうだ黄児、まだ続けるのか？」
「他のゲームしようよ。おれもう飽きた」
「ふん、そうか。所詮お前のヒーローになりたいという夢はその程度だったんだな」
「なんだとー！！もう1回、いや勝つまで続けるぞ！！」
「そうだ、その心構えは大切だな」

気合いを入れ直して再び姉ちゃんに挑む黄児。
その甲斐あってか最初から姉ちゃんの操るキャラを手数で押していく。

「へえ、多少は手応えが出てきたな」
「絶対に負けないぞ！おれはヒーローになるんだ！」

・・・あんなにひた向きに頑張れるのが羨ましい。
俺には何かあるのだろうか？誰にも譲れない、いわば芯となる様な物を持っているのか？

「あららら、ねえ黄児？カツ丼おごってあげるから手加減してほしいなぁ」

・・・なんという情けない姉上様だ。
あいつはもう人間じゃない、虫だ。
ああはならない様にしよう。
姉ちゃんをボコボコにして気を良くしたのか、黄児は外でトレーニングしたいとジャージに着替えた。
寒いのに良くやるな。

「頑張るな、黄児」
「うん！やっぱりヒーローなら強くならなくちゃ！走ってくるね！」
「待ってくれ、俺も行きたい」
「ホント？分かった、一緒に走ろうたつにぃ！」

たまには弟の面倒を見てやるのも悪くない。
黄児といると正直疲れるんだけど、その分元気を貰えたりするからな。
掛けてあったお気に入りの黒いジャージに着替えて、黄児と共に家を飛び出した。
俺とは違って夜中でも目立ちそうな、自分の名前と同じ黄色いジャージを着ている黄児。

名前も性格も明るければ好きな色も明るい、それが俺の弟だ。

「1、2、3、4っ！」

一歩ずつ走る毎にカウントしている。
太ってるのになかなかフットワークが軽いので、他人が外見だけで判断すると痛い目に遭うだろうな。
世の中には動けるデブもいるとどこかの有名人が言ってたが、黄児は典型的なそのタイプに間違いない。

「・・・・・・！！」

急に振り返り、来た道を戻り始めた。
忘れ物かと思ったが家までは戻らず、全く違うコースを走っていく。

「どうしたんだ黄児、いきなり道を変えるなんて」
「嫌なんだよ・・・あっちの家、いつも通ると犬が吠えるんだ」
「ふうん、だから急にUターンしたわけか」
「わ、笑うなよたつにぃ！ヒーローにだって怖いものはあるんだぞ！」

そりゃあ、そうだな。
完璧な人間なんてもしいるなら見てみたいよ。
誰しも必ず欠点や怖いものはあるんだ。
姉ちゃんは容姿はそこそこだと思うけどあの弟を何とも思わない残念な性格。
兄貴は普段は冷静だけど酒癖が悪いところ。
俺は、良くも悪くも色々と無難だと母さんに言われた。
みどりは、感情があまり表に出ないところかな。

「でももしその犬が悪い奴らに襲われてたらどうする？」
「ちゃんと助けて、でも怖いから逃げるよ」

・・・頑張れ黄児。ヒーローになれるその日まで。

〜〜続く〜〜

3・黄児の夢

人物紹介

進藤紅音（あかね）…２２歳Ｏ型。長女。ラーメン屋の店員。物事を細かく考えるのが苦手。

進藤蒼太（そうた）…２１歳大２Ａ型。長男。穏やかで几帳面。酒に弱い。

進藤巽（たつみ）…１７歳高２Ｂ型。次男。一応本作品の主人公。上と下に挟まれ気苦労が絶えない。

進藤みどり…１６歳高１ＡＢ型。次女。口数が少なく心配性。

進藤黄児（こうじ）…１０歳小４Ｏ型。三男。脳天気で考えるのが苦手。食べることが大好き。

進藤銀太郎（ぎんたろう）…４８歳ＡＢ型。進藤家五人兄弟の父親にして柱。小説家で書斎に籠もっているので、出番はそれなり。

進藤輝子（てるこ）…４６歳Ｂ型。進藤家五人兄弟の母親にしてもう一本の柱。お喋りするのが好き。

4・蒼太の変貌

兄貴はとにかくよく周囲を見ている。

「あら？お砂糖どこかしら」

「はい、母さん」

料理の途中調味料をどこに置いたのか分からなくなった母さんを、さり気なくフォローしたり

「あれ？！私の携帯どこ？誰か知らない？！」

「姉さんがさっき自分でテーブルに置いてたよ」

「あ、あはははは、そっかそっか、トイレに入る前に置いたんだっけ」

まだ二十代の入り口で既にボケが始まっている姉ちゃんに優しく対処したり

「蒼太兄さん、この問題なんだけど・・・」

「うん、これは２つの方程式を使えば解けるな」

分からない問題を聞きに来たみどりに、分かりやすく的確に教えたり、俺から見たら頼りになる人物だ。

モデルみたいな整った顔立ちに細身の体型で、好きな青い色のシャツを見事に着こなしてしまう。

そして誰に対しても優しく穏やかな口調で話すので、兄貴と接して嫌な印象を持つ様な奴はまずいない。

まさに理想の兄貴だ。

こんな立派な身内がいるのは素晴らしい事だと思う。

しかし、あくまで素晴らしいのは進藤蒼太自身であり、別に俺の評価には繋がらないと考えると、虚しいものだ。

そんな卑屈にならなくてもいいか、はは・・・

「今日も寒いなぁ・・・・・・参っちゃうね」

細長い指や美しい手を擦り合わせるその仕草・・・

もし、もしも俺が女の子だったとしら、巽ではなく立美(たつみ)ちゃんだったとしたら、もう萌え死んでいたに違いない。

いやいや、違いますよ。僕はれっきとした健全な男の子です。

夏服の透けるブラに興奮してしまうピュアな高校2年生なんですから。

勘違いしないでいただきたいであります！

だが、神様というのは悪戯が大好きな人だ。

それも、子供よりもずっと残酷な悪戯を好む。

容姿端麗、文武両道な兄貴にも欠点を作ってしまったのだ。

以前ちょこっと触れたかと思うが、完璧な人間というのはこの世に存在しない。

でも、さぁ・・・・・・これは酷いだろ、なぁ神様よぉ？あ？あぁん？

「おう、蒼太。付き合うか」

「うん。いいよ姉さん」

食後のこの会話で俺を含めた全員が凍り付いた。

お願いだ姉ちゃん、やめて。ホントに止めてください！

姉ちゃんは家族の思いをよそに冷蔵庫から焼酎を取り出し、勢い良くテーブルに置いた。
ああ、ダメ。兄貴のグラスに注がないで、お願いだから。
しかし兄貴は躊躇う事もなくそれを傾けた―
瞬時に動きが止まり、目が座る。ああぁ・・・もう俺の知っている優しい兄貴はいないんだぁ。

「ケッケッケッケッ、いい気分だぞぉ～」

兄貴は下戸なのだ。
おまけに酒癖が悪く、普段の優しい人格が眠りについてしまう。
代わりにとんでもない人格が目を覚ますのだが、それは飲む度に変わるので家族である俺達ですら、直前までどうなるか分からない。
今日は多分、良く笑いそうな感じだな。

姉ちゃんはそれが楽しいらしく、わざと酒を飲ませる。
なっ？クズだろこいつ。こういうマネして、何が楽しいんだろうな？

俺達は柱の影から様子を伺っていた。
触れたら火傷じゃ済まない。遠くから見守るに限る。

「おい姉さん、何か面白い話は無いのか？」
「あるよ。布団がふっとんだ、なーんつってあひゃひゃひゃひゃひゃひゃ」

すでに姉ちゃんも出来上がっている。
だが、兄貴はそれ以上に目が据わっていたのだ。

「何がおかしい？」

「おかしいでしょ、あひゃひゃひゃひゃ。布団がふっとんだんだよばーんって！」
「何がおかしいのかと聞いている！幼稚すぎるんだよお前って奴は！」
「なんだとぉ～蒼太ぁ～。姉さんのギャグがつまらんだとぉ～」
笑っていた姉ちゃんも目が据わっている。
今すぐに焼酎のビンを割って凶器にしてしまいそうな程、極悪な顔をしていた。
2人とも会社やサークルで飲み会に誘われなくなったとぼやいてたが、これでは仕方ない。
家族ですら近寄りたくないのに、同僚や友達なら尚更だろうな。
頼むからせめて楽しいお酒にしてくれよ・・・笑うのが一番だぜ、何にしてもな。
「・・・！」

その時、テーブルの携帯が鳴った。
あれは俺のだ。回避を優先してて、肝心な物を持ってくるのを忘れてた。

ほっとけばいいのかもしれないが、俺の周りは電話に出ないという行為を嫌がるやつが多い。
嫌だ、友達を失いたくない・・・っ！
俺は意を決してリビングに向かう事にした。

「お兄ちゃん・・・」
「大丈夫さ、みどり。必ず生きて帰る」
「お墓に好きなコーラかけてあげるね」
「巽、毎日メンチカツお供えするから」
「たつにぃ、俺もちゃんとお参りするから！」

・・・なんで生きて帰れないのが前提なの？
そりゃ目の前は龍と虎が睨み合ってて、飛び込む俺はウサギみたいなものだが。
いやいや気配を消せば問題ない。ほら、俺は石です。路傍の石ですよ～。
携帯はまだ鳴り続けている。間に合う、間に合う・・・・・・間に合え～！

「巽」

姉ちゃんのドスの利いた声に震え上がり、足が竦んだ。
手を伸ばせばそこに携帯があるのに全く身動き出来なくなった。

酒が悪いんだ。
ついでに言うなら姉ちゃんがもっと悪い。

「なに？」
「呼んだだけ」

そういうと姉ちゃんは笑い転げた。
椅子から落ちても腹を抱えて笑っている。
・・・よく分からんが助かったのか？
さっさと携帯を取って逃げよう。長居は無用だ。

「巽」

しかし、もう一匹の猛獣が優しく声をかけてきた。
・・・ええい強行突破だ。一匹だけならなんとかなる！

「どこへ行くんだぁ～」
「うわぁぁぁぁぁ？！」

やめろ、抱き付くな！うわっ酒臭い、やめろ！
せっかく携帯を手にできたのにこれじゃ・・・！
まだ鳴り続けてる、こうなればこのまま出てやるぞ。

「・・・・・・！！」

・・・切れた・・・

呼応するかの様に、俺の体から力が抜けていった。
もうどうでもいいや・・・

「おやすみ」

兄貴は抱きついたまま寝てしまった。
俺は酒なんか飲まない。

～～続く～～

5・紅音の長所

人間、誰しも長所のひとつくらいはあるものだ。
光があれば影がある様に、欠点があれば長所もある。

・・・うちのお姉様を除いては、な。
ていうかこの人のいいところって何？真面目に聞きたい。

兄貴は人当たりが良く優しいところ、みどりは物静かで一緒にいると気を使わなくて済むところ
そして黄児は底無しの明るさがあって、見てると自然に癒されるところ・・・
母さんは料理が上手だし俺達兄弟の好みに合わせた完璧な味付けができる。
父さんはみどりに負けない位静かだが、人を笑わせるのが好きらしく少ない会話でも小ボケを挟むから話してて面白い。

でもこのク、いやいや素晴らしいお姉様にはいいところなんか何一つありはしないと思う。

ここ数日の行動を見ても朝っぱらから俺を階段から落とす、それから車でひくけど気付かない、
俺の大好きな食べ物を奪う、黄児にゲームで勝てないから食べ物で釣る、
そして酒に弱い兄貴を酔わせて楽しむ・・・
裁かれるべき悪業の数々、神様が許してもこの俺は許せない。
なんだか良く分からないが姉ちゃんはやたらと俺ばかり標的にする

のだ。
黄児は溺愛といってもいいくらい休みの日は可愛がってるし、俺と年が近いみどりも同じくらい遊んでいる。
兄貴は、たまに酒を飲ませたりするが基本的には仲が良い。

俺だけだよ・・・・・・
なんでそうなの？ねえどうしてなの？
兄貴やみどり、黄児を車で跳ねないのはどうして？
いや、跳ねてほしい訳では無い。俺を跳ねないでほしいの。

俺、姉ちゃんになんかやったわけ？なあどうしてだ。
・・・面と向かって聞けたら楽だろうな。
聞いたらますます面白がって悪戯がエスカレートしそうだから、怖くて聞けない。
そうだよ、俺は弱虫だ。だから仕方ないじゃないか。

「・・・・・・戻るか」

朝の散歩に出かけたがやっぱりもやもやする。
それに、寒い。１２月だから当たり前だけど、真冬にはまだ早いのに。
今からこんなだったら本番はどうなってしまうんだ？
家に戻るともう８時だったが母さん以外は誰も起きてなかった。
軽く挨拶の会釈を済ませ、自分の部屋に戻る。

「最悪〜〜〜〜〜〜！！」

そしたら人のベッドに寝てやんの、あいつが。
何してんのこの人？なんで自分の部屋で寝ないの？
やめてくれ・・・真冬なのにＴシャツにパンツだけという、防寒も

へったくれも無いスタイルで寝るのは。

「・・・・・・」

馬鹿姉は俺に気付き、顔を上げた。
瞼が微かに開きかけていたが、すぐにまた眠りに落ちる。

「邪魔すんなよ、寝たいからあっち行け」
「・・・・・・・・・」
「無視すんな！！」

すると姉ちゃんはめんどくさそうに尻を持ち上げた。
こ、この体勢は、やばい。今すぐに逃げなくては！

ぶぅ～～～～～～～～、プスっ

し・・・しまった・・・やられた・・・
しかも間延びしたくせに、歯切れが悪く最後に小さく途切れたのが
余計にむかつく。
いやあ頭にくるね。返事をこういう形でされるってのは。
まるでお前が出ていけと言わんばかりの行動だな。

うわぁこれは酷い。
毒ガスが俺の部屋に充満してるぞ。

「窓開けるなよ、寒いでしょ」
「嫌なら原因を作るな。この悪臭女」
「そりゃあんたでしょ。汗臭いわねこのベッド」
「だったら自分のとこで寝ろ。早く出ていってくれ」
「疲れてんの～・・・巽の部屋、日当たり良くてあったかいんだも

ん・・・」

暖を求めているのか。だったら厚着して寝ろ。
まったく、いつまで人の部屋に来るつもりなんだよ・・・
もう俺は高校生なんだし、普通の姉弟なら自然に壁が出来るはずだ。
だが姉ちゃんはそんなのお構い無しだ。
下手すれば未だに一緒に風呂に入ろうとするかもしれない。
仲が良いにこした事は無いが、多少の線引きみたいなのはなければおかしいよな。

とにかく、姉ちゃんといるとそれだけで疲れちまう。
でも他のみんなはあまり嫌がる素振りは無いんだよな・・・
やたらと家の中で姉ちゃんは家族に呼ばれる事が多い。
そういや、いつも誰かしらと一緒にいる事が多い様な・・・
「巽ぃ～」

寝呆け眼で姉ちゃんは俺を呼んでいる。
なにをにやにやしてるんだ、キモチ悪い奴だな。
でも何故か、理由は無いんだけど近くに行きたくなって近付いた。
やられたらやり返せる様に警戒していたが、あっさり捕まってしまう。
カメレオンか食虫植物に捕まるハエもこんな気分なのかな。
そのカメレオンか食虫植物は、間延びした屁をこくのだろうか？

「は、離せ！」
「ん～～～、やっぱり巽はあったか～い」

まるで抱き枕みたいに俺を締め上げる姉ちゃん。
あ、頭に血が昇ってる・・・苦しい・・・やめろ・・・！

「離せぇ・・・姉ちゃん、やめろぉぉぉ！！」
「いやだ。下手な布団や毛布よりあったかいんだもん」
何が哀しくて日曜日の朝からこんな目に遭わなくてはならないんだ？
俺はいい歳した姉ちゃんに抱き付かれて喜ぶ趣味なんて無いぞ。

「ねえ、巽」
「・・・・・・・・・・」

息がかかる距離にある、姉ちゃんの顔。
寝起きだから当然化粧なんかしてないんだけど、肌は綺麗で眉毛もしっかり残っている。

「覚えてる？あんたがちっちゃい頃はよくこうしてたんだよ」
「いつの話だ・・・」
「覚えてないかー。そもそもウソだし」
「呼吸するみたいに出任せを言うな！」
「それも出任せ。さあ、どっちだろうねぇ～・・・」
「おい、姉ちゃん？！」

・・・・・・また寝ちゃった。
おいおい、せめて腕はほどいてから寝ろよな。
そういや姉ちゃんの長所って結局なんだったんだろう・・・？
しいて言うなら不思議と周りに人が寄ってくるところ、だろうか。
ん？なに、無理矢理まとめた感じがする？
あぁ・・・聞こえない・・・
あーあー・・・聞きたくない・・・
なんだか眠くなってきたぞ。姉ちゃんの眠気が伝染したか。
いつもに比べたら今日の姉ちゃんはまだましな方だな。

じゃ、おやすみ。

〜〜続く〜〜

6・輝子、英雄

どんな相手にも怯まない人って、周りに1人はいるでしょ？
俺の場合は母さんがそれに該当する。
姉ちゃんも大概は物怖じしないんだけど、さすがに怖い人種くらいはいるのだ。

それが、今目の前でくちゃくちゃと咀嚼しながら俺を脅している、明らかに堅気では無い風貌のおじさ・・・お兄様です。

「あの、だから、うちはもう間に合ってるって・・・」
「いいから取ってくれよ新聞。それくらいの余裕あんだろ？」

全く話の通じない御方だ。
誰もいない時を狙ってくるなんて、まるで空巣みたいなヤク・・・
おじさんだな。
姉ちゃんはまだ店だし、兄貴達も学校だ。
もしいたら数で対抗できたかもしれない。少なくとも俺1人よりは善戦できたかも・・・

しかし、見事に絵に書いた様なヤクザだな。
パンチパーマに顔につぎはぎの跡、白いジャケットにラメの敷き詰められた趣味の悪いシャツ・・・・・・

お願い、誰か助けて。
俺だけじゃ無理かも・・・いや、絶対に無理。

「じゃあ気が変わるまで待たせてもらおうかな」
「ちょ、ちょっと！勝手に入らないでくれよ！」

ああ・・・怖い。泣きそうだ。
誰か俺を助けてくれ。不幸から守って・・・・！

「何かご用ですか？」

き、来た。
・・・・・・来たぁあああぁあああ！！
これ以上無い援軍が来たぞ！！

「ああん？なんだてめえは」
「初めまして。私はこの子の母親、進藤輝子（てるこ）と申します」

母さんはパンパンに膨れた買い物袋を両手に掲げたまま、礼儀正しく頭を下げた。
どんな相手にも別け隔てなく自己紹介するのは母さんのいいところ、なのか？

でも、分かる。
笑顔の下に強烈なオーラを潜ませているのが・・・
可哀想だなこのヤクザさん。行動次第だけど、恐らく９４パーセントの確率で泣いちゃうかも。

「か、母さん」
「心配ないわ巽。お腹空いてるでしょう、すぐに終わらせてあげる」
「そうじゃなくて、程々に・・・入院させちゃダメだぞ？」

・・・怖い。
笑顔で頷くのが怖いです。
「ナニをごちゃごちゃほざいてんだババア。クラすぞ！！」
「あなたどの様な用件でうちにおいでになられたのですか？」
「そんな事はどうでもいい！！しねっ！！」

ああ、しぬよ。
あなたがね・・・・・・

俺は物陰に隠れながら試合の成り行きを見守る事にした。
ＲＯＵＮＤ１、ファイッ！！
まあ２は無いだろうけれど。

「オラァァァァ！！」

力に任せたナックルに腰を反らせて、寸前で躱す母さん。
すかさずその手を取り、素早く体を反転させて背中に相手を背負い込んだ。

「ぬぉぉぉぉぉぉ？！」

恐らく体重が倍は重い相手を軽がると投げ飛ばしてしまう。
地面に叩きつけたヤクザの首元に右足をカミソリみたいに近付けた。

「まだ続けますか？」
「舐めるなこのババア！！」

あ・・・また言った。
一瞬母さんの目付きが鋭くなったのを、俺は見逃さなかった。
ヤクザは起き上がり突進を仕掛ける。
それも軽いステップで躱し、相手の腿の裏に鋭い蹴りを放つ母さん。
自分から攻めるのではなく主にカウンター主体でのスタイルは健在だった。
仮面のヒーローで例えるなら、飛んでくる赤いカブトムシをベルトに装着して変身するあの人に近い。

「あなたの罪は全部で3つあります」
「な、なんだと・・・？！」
「ひとつ・・・初対面の人に悪口を言った事。
ふたつ・・・お口が下水道の様な臭いがする事」

ああ、失礼だなそれは。
歯くらいはきちんと磨かなくちゃね。

「みっつ・・・私の子供を怖がらせた事。最初の2つはこれに比べたら、無罪に等しい！」

か、母ちゃん・・・
そんなに自分の子供の事を・・・・・・

「知った事かぁぁぁ！！新聞取れやぁぁぁぁぁぁぁ！！」

尚も突進してくるヤクザの腹に、正拳突きをたたき込む母さん。
激痛に硬直している相手の前で右足に力を込めた。
数秒の間の後、必殺技の回し蹴りを放つ。

「ぬぉぉぉぉぉぉ？！」

ヤクザはまるでトラックに跳ねられたかの様に吹き飛び、そのまま道路に崩れ落ちた。

「大丈夫？巽」

「う・・・うん・・・・」

いくら母さんと分かっていても、実際にあの力を目の当たりにしたら怖いものは怖いのだ。

もし侵略者が攻めてきたとしても母さんがいれば我が家は大丈夫だろうな。

こういうジャンルじゃなくてアクション物に転送されても、立派にやっていけそうだ。

俺は無理だな。こういうグダグダ系の話のキャラクターで良かったと心から思う。

「向こうもお仕事だから仕方ないけどね。でも、高校生を脅すのは良くないと思うわ」

「今時あんなヤクザいるんだな。驚いたよ」

2つある買い物袋をもう一度手に持ったけど、重そうだったので代わりに持ってあげた。

確かに重いけどそれほどでも無い。

あんなヤクザを軽々と退治してしまったにも関わらず、これが重いなんて・・・

やっぱり母さんも女性なんだな、と思った。そして、女性であり俺たちの母親なんだと、妙に安心してしまった。

「・・・・・・ただいま」
「たつにぃ、母ちゃん、ただいまー！！」
そこに丁度みどりと黄児が帰ってきた。
キッチンに並んだ大量の野菜や肉を見て、黄児は目を輝かせている。
「今日の晩飯なに？！」
「黄児の好きなカレー鍋よ」
「やったぁ！！」
野菜を切るのを手伝っている俺やみどりをよそに、無邪気にはしゃいでいた。
「母ちゃん、おれ今日学校でさ、友達いじめてる悪い奴がいたからやっつけた！！」
「あら、よくやったわね。でも無闇に相手を叩いちゃダメよ。力は大切な人を傷つけられた時にしか使っちゃいけないの」
「大丈夫！！怒鳴っただけだからな！！でも、また来たらやっつけてやる！！」
・・・黄児はまだ知らないよな。
母さんもヒーローだって事を。
お前もいつか家族が出来たら、母さんみたいな立派な人になるのかな。
でもまだまだ先の話だよな。
未来のヒーローは、好物を楽しみに待っていた。
〜〜続く〜〜

7・銀太郎はボケ好き

父さんは小説家だ。
大学を出て１０年サラリーマンをした後に会社を辞めてデビューした、らしい。
もう１５年目なので、俺が物心ついた時には既に小説家だった。
デビューの年は姉ちゃんと兄貴は小学生で、俺はまだ2歳、みどりはまだ1歳だった。
そして、黄児はまだ生まれてない。

本を全然読まない俺でも、小説を書くのが大変だってのは何となく分かる。
小さな頃から書斎に籠もりっきりの父さんを見てきたから、本を生み出す為は時間が必要なんだと分かるのかもしれない。

それにしても、仕事とはいえ何日も部屋から出ないなんて凄いよな。
俺だったら脱走するね。間違いなく耐えられない。

「あっ」
「おう、巽か」

学校から帰った後、2階に上がったら部屋から出てきた父さんと鉢合わせた。

「仕事終わったの？」
「一段落ってとこだな。全体で八割だ」
「あと少しだね」
「頭の中ではな」
「って妄想かよ！」

思わず突っこんでしまった俺を、嬉しそうに見ている父さん。
いつもこうだ、父さんは会話の中に毎回小ボケを挟むからな。
1週間の内で話す機会はあんまり無いけど、会うとほぼ毎回こんな感じだ。

「巽、ちょっと付き合ってくれないか」
「いいよ」
「ではまず文通から始めようかな」
「今時文通かよ！しかも自分から誘っといて奥手だな！」
「お前は優しいな。みどりにいつも軽く流されてしまうから寂しいんだ」

みどりはあまりこういうキャッチボールは得意じゃないからな。ボケをかます相手としては適切ではないと思う。

「今日はどこに行くんだ？」
「風の吹くまま気の向くまま、好きな場所に行きたい」
「ふぅーん、つまり決めてないんだね」
「まあそう言うな。ジョギングというのは決めたコースだけでは飽きてしまうのだぞ」

・・・今のはボケじゃなかったのか。いつもの癖で突っこんでしまった。
シルバーのジャージを着た父さんと並んで、土手を自転車で走る。
父さんはスキンヘッドでメタボ体型といういかつい見た目なので怖く見られがちだ。
中身を知っていれば別に怖くないんだけど。
健康の為に空いた時間はこうしてジョギングしている。
本当は毎日続けたいと言ってたけど、仕事柄なかなか時間が取れな

いのだ。

体型のわりに速く走れるのは、もう何年も続けているからだろうな。

「どうだ巽、父さんは速いだろう」

「ああ、追い付くの大変だよ」

「空気抵抗ゼロだからな」

頭を誇らしげに撫でながら顔を決めたので、思わず笑ってしまった。

体の特徴を自ら笑いのネタに出来るのは凄いと思う。

丁度夕方という時刻のせいか部活中の中学生や会社帰りらしきランナー達とすれ違う。

「・・・・・・・・・」

別にただの思いつきで、そんなに深く考えたんじゃない。

もし父さんが小説家にならずサラリーマンだったら、どうなってただろう。

きっと朝早くて夜遅いだろうから、顔を合わせる事が無いのは変わらないかな？

日々の仕事に疲れて小ボケを言う余裕も無いだろうか。

それはそれでいいかもしれない。正直、毎回突っこむのは辛かったりする。

「どうした巽、目線が明後日の方角に向いてたぞ」

「えっ・・・そ、そうか？」

当たらずとも遠からず、ってとこだな。

ある意味違う未来を想像してたんだから。

「父さんがメタボじゃなくなったらどうなるのかな、って思ってたんだ」

「ただのおっさんだな」

「小説家だろ？」

「うむ、そうだな。そしてお前達の父親だ」

当たり前の事かもしれない。

でも、なんだかとても大事な事を言った気がする。

「小説家・進藤銀太郎である前に、俺は輝子の夫であり5人兄弟の父親だ」

なんだか、父さんの口から聞くとそれが大事な気がしてきた。

でも恥ずかしい。突然こんな話題を切り出すなんてどうしたんだろう。

・・・まさか父さんは重病を隠していて、息子にそれを打ち明けるとか？

何となく辻褄が合うぞ。

だからいきなり自分は父親だなんて言い出したんだ。今のうちに言っておきたいなんて・・・

「巽」

「父さん！病気になんか負けるな！」

「・・・・・・レベルの高いボケをかましたな。なんなんだいきなり」

「だってタイミング的におかしいよ！日常的な場面でいきなり、自分は父親だなんて」

「おかしな奴だな、お前は。なんで不安になる必要があるのだ」

そ、それは・・・・・・！

何ででしょうね？俺もいきなり不安になってきたもんで、さっぱり分かりません。

この話の事だから多分今回の出来事が伏線になるとか、まず無さそうだな。

いけない、一応主人公的な役割を担うこの俺が、自分の出る話の内容がどんなのか把握出来てないなんて・・・・・・

まあ書いてる人がその回の内容すら考えてないから、俺はただ踊らされるだけだな。

「良かった、まさかツッコミのお前にボケ気質が宿っていたとは思わなかったがな」

「はい？」

「紅音がいい素質を持ってると思ってたんだが、あいつは天然気味だからな。兄弟の中ではお前しかいない、今のところは」

「そうなの・・・」

うまい突っこみが出来ない。

いつものボケ、いや小ボケだったら反射的に返せるんだけど。

こっちも急に不安になったから聞いたのであって、あまり素質があるとか言ってほしくないな。

そうこうしているうちに折り返し地点を過ぎていた。

「しかし驚いたな、いきなり病気がどうこう言い出したから」

「もういいってその話は」

余程面白かったのか、父さんは珍しくいつもより饒舌だった。
あまり言われるのは好きじゃないけど、笑ってくれたならいいかな。

「ふう、今日は良く走ったな」
「もう真っ暗だ、早く帰らないと」

今日は久々に父さんの笑顔を見た。
時折発言の意図が見えないけど、別にいいか。
この人がいなかったら俺は、俺達は生まれてないんだから一

だから笑ってくれ父さん。
何事も笑顔が一番だ。

〜〜続く〜〜

8・巽は無難

えっと・・・こ、今回は私が語り手を勤めます。あんまり喋るのは得意じゃないですけど、頑張ります。
あっ、名前言わないと分からないですよね。進藤みどりです。
5人兄弟の4番目、下から数えた方が早いです。
成績じゃなくて年齢です。でも、そういう言い方はおかしいかな。
一体何が早いのか分からないし・・・

今日はお兄ちゃんの話らしいので、私がこうして話してます。
あっ、話してると言っても実際に口に出してるんじゃなくて、思った事が文字になってるといった方が正しいかな・・・

ごめんなさい、相手に伝えるのが苦手なんです。

それで今日はあの人を紹介します。
姉さんや蒼太兄さん、黄児と比べたら普通のあの人・・・お兄ちゃん、進藤巽です。
普通っていうか、お母さん曰く無難らしいです。
うるさい、いや賑やかなお姉ちゃんやもっとうるさい黄児に比べたら確かに普通です。

今日は久々に兄弟揃っての外食です。
外に行くとこの2人は家以上にうるさくて、周りのお客さんに迷惑をかけてしまう事はよくあります。
そのせいか、お兄ちゃんは騒ぎません。
でも静かな蒼太兄さんや、無口な私よりは喋ります。
少なくともその場が気まずくなる事は無いでしょう。だから、そういう意味では無難な人なんです。

そして服装も・・・

「なんだみどり？俺の顔に何かついてるか？」

「・・・普通」

「えっ？聞こえない」

目立ちやすい暖色系の赤のお姉ちゃん、黄色の黄児
逆に落ち着いた寒色系の青の蒼太兄さん、緑色の私
そしてお兄ちゃんは黒。よく街でも黒い服着てる人見かけますよね？お兄ちゃんも沢山いる中の1人なんです。
別に変じゃない、でもいっぱいあるから目立つ事もない。だから無難です。

「変な奴だな、兄貴の服なんかじっと見てるなんて」

「目立たないなぁ～こいつ、って思ってんでしょ」

お姉ちゃんに心の中を見透かされたと思ってしどろもどろになった。
い、いやいや、お兄ちゃんをそんなふうに思うのは・・・失礼だから・・・
気を取り直して席に座ります。
お姉ちゃんは黄児を隣に座らせて、私達3人は向かいに座りました。

「黄児、何にする？」

「ハンバーグカレー大盛り！！あとレモンステーキ！！」

「じゃあ私はチゲ鍋」

「姉さん止めといた方がいいんじゃない？この間もそれでお腹壊したでしょ」

「次は負けない！これは私とチゲ鍋の真剣勝負よ」

私も蒼太兄さんと同意見です。

あの時３０分近くもトイレで唸ってたのに、また食べるなんて無謀もいいところ。
辛いのダメなくせに食べたがるんだよね・・・姉さん。
「そっか、本気なんだね。俺はシーザーサラダとコンソメスープにしとくよ」
「それだけ？あんたもしかして馬？」
「昨日友達と食事して食べ過ぎたからね・・・姉さん、馬の顔真似はやめてほしいな」
あまり食べない私でも蒼太兄さんは少ないと思ったら、そういう理由があった。
「私はグラタン」
最後はお兄ちゃん。
「俺はカルボナーラにする」
・・・・・普通だ。
いたって普通だ、お兄ちゃんは。
「何だよみどり、俺なんか変なものでも頼んだか？」
「うっ、ううん、何でもない」
「面白味のないもの頼んだって思ってんでしょ」
「違う・・・・・」
「姉ちゃんみたいに腹弱いのに辛いもの頼むアホよりはましだと思うがな」
「うるさいこのボケ！罰として来たら半分食えよ！」
「最初から頼りにするつもりだったんじゃねえか！」

黄児みたいに大盛りでもなくて、お姉ちゃんみたいに冒険しない。
蒼太兄さんみたいに特に体を気遣う訳でもない、あくまで普通。

「人生は1度きり、楽しんだヤツが勝つのよ」
「おい・・・やめろってば、姉ちゃん。まじで・・・」

ぐつぐつ煮立っている真っ赤なチゲ鍋に、タバスコと胡椒を二刀流で投入していくお姉ちゃん。
お兄ちゃんも蒼太兄さんも私も、そして黄児までも顔が引きつっていた。

「飲食業で働いてる奴のする事じゃねえぞ。なあ黄児、食い物で遊んじゃダメだからな」
「もぐもぐもぐ・・・えっ、たつにぃなんか言った？」

結局、お姉ちゃんは今回も負けた。
何とか完食はしたものの顔は汗まみれになり、早速お腹が悲鳴をあげ始めたんです。
なので蒼太兄さんが運転を代わる羽目になりました・・・

「だから言ったんだこの間抜け。腹が弱いんだからもうやめとけって」
「ふっ・・・簡単に勝てる様な勝負なら最初から挑まないわ。いた・・・蒼太、優しく運転してくんない？」
「いいけど、ゆっくり走っても大丈夫か？」
「・・・急いで。私の精神力は長くは保たない」

周りからやめろと言われたらやりたくなる。それがお姉ちゃんです。
昔から無茶ばかりしてきたのですが、三つ子の魂なんとやらで今で

も変わってません。
助手席で苦悶の表情を浮かべながら蹲っています。
そんなお姉ちゃんを、お兄ちゃんは心配そうに見ていました。
よくお姉ちゃんにつっこみを入れたりしてるけど、なんだかんだで一番話してるのは多分お兄ちゃんじゃないかな、と思います。
お姉ちゃんも、心なしかお兄ちゃんと話す時は生き生きしている様に見えます。

「兄貴、胃薬ってリビングのテーブルにあったよな」
「ん・・・ああ、確かそうだったな」

呆れている私や満腹で他の事が頭に無い黄児をよそに、お兄ちゃんはちゃんとお姉ちゃんを心配しています。
無難で普通だけど、お兄ちゃんは優しいんだな・・・

「何だよ、みどり。なんか今日やたらと顔見すぎじゃねえのか」
「そ、そう？気のせいだよ・・・・・・」
「お前今笑ってたぞ。変なこと考えてたろ」
「半分食べてあげればお姉ちゃんは苦しまなかったのに、こいつは悪魔だ。どうだみどり、お前の心を読んでやったぜ」

俗に言うドヤ顔を向けてくるお姉ちゃん。

「ハズレ。お姉ちゃんの部分だけ正解」
「なるほど、当たりか。あたたたた、ちょっと蒼太、優しく運転してよ～」

みなさん、お兄ちゃんのこと少しは分かりましたか？

歳が近いので話しやすいんです。機会があればまた・・・それじゃ。

〜〜続く〜〜

9・紅音、風邪をひく

「無理しない方がいいんじゃない紅音」
「平気だって。これくらいで休んでらんないよ」

あくびしながら降りてくると丁度姉ちゃんと鉢合わせた。
なんだか鼻声だな、もしかして風邪でもひいたのか？
そういや昨日トイレに籠城した後、胃薬飲まず遊びに行ってたな。
ちゃんと飲んどけっていったのに、俺や兄貴の忠告をなんだと思ってるんだろう。
まったく、社会人のくせに自己管理も出来ないのか？

腹痛を拗らせて風邪ひくなんて馬鹿馬鹿しすぎるよ。

「遅いぞ巽、こないだは早かったのにどうした」
「人のことやかく言えるのかよ姉ちゃん。腹痛いのに遊びに行くからそんな声になるんだ」
「馬鹿、チゲ鍋はパワーの源よ。食べる前からちょっと風邪気味だったの。寧ろ良くなったと思うけど」

・・・あくまで自分のミスは認めない、か。
別に押し付けてるつもりはないけど、これでもちゃんと気遣ってんだから少しくらいは聞いてくれたっていいのに。
まあ昔からそうだったからな、今更変えられる訳ないか。
風邪引いても落ち着きが無いから平気で歩き回るし、それで兄貴も俺も伝染させられた回数は数えるのが面倒臭いほどある。

「んじゃ、行ってきまーす」
「いてっ！」

ポン、と俺の胸を押してにやにやしながら出ていった姉ちゃん。
まるで、心配いらない、なんて言いたげな顔をしながら。
姉ちゃんは無茶ばっかりするくせに体はあんまり強くないから、多分今日は早退するだろう。
その逆で、黄児は生まれてからまだ1度も病気らしい病気を患っていない。
冬でも長袖を着るのを嫌がるくらいの健康優良児だ。
家族の中では父さんに次いで寒さに強い。体型も同じだからだろうか。
見た目の割りに動きが機敏なところも似ている。
姉ちゃんも、体の強さを持っていたら良かったのに・・・

別に心配なんかしていない。
風邪の時も普段と変わらず鬱陶しいから、それが嫌なだけ。
だから勘違いしないでほしいね。俺は別に心配なんかしていないのだ。
学校から帰ると、姉ちゃんのブーツがあった。
やっぱりな・・・・・自分の不始末で職場に迷惑かけるとか、ダメな人だ。
よく俺に社会人がどうたらこうたらと偉そうに言うくせに、何をしている。

「お帰り巽」

丁度母さんがお粥を運ぼうとしていたので、代わりに持っていく事にした。

「いいの？宿題は」
「今日は無い。それに、軽く説教してやりたいんだ」

全くあの姉ちゃんときたらどうしようも無いな。
乱暴にノックして部屋に踏み込むと、どうしようも無い人がベッドにへたり込んでいた。

「・・・・・・巽？」

顔はリンゴみたいに真っ赤になっていて、濡らしたタオルを額に乗せている。
弱っている姿を目の当たりにして、どんな言葉をかけていいのか迷ってしまう。

「あ、お粥持ってきてくれたんだ。サンキュー」

声も朝よりかすんでいる。
色々と言ってやりたい事はあったけど、病人を前にしたらそんなものは吹き飛んでしまった。
今年だけで数えても今回が初めてではなく、確か2回目だったと思う。

「し、仕事はどうしたんだ」
「無理しなくていいって言われた。今日ちょっと人少ないからやりたかったけど」

どうやら、自分で早退したいと願い出た訳じゃないらしい。
諦める時はあっさりしているあの姉ちゃんも、仕事に関してはそうじゃないんだな。
まあ当たり前か。社会人ならば、な。姉ちゃんの言葉を借りるけど。

「巽」

「なんだよ」
「・・・・・・・・・」
口を開けて指差している。
「虫歯でもあるのか」
「違うよ。自分で食べるの面倒だから」
えっ？
食わせろって？！
なっ、なんでそこまでしなきゃなんないんだよ！
やめてくれ恥ずかしい。俺もう高２だぞ？！
「嫌だな、そんな露骨に拒否する顔しなくてもいいだろ」
「か、母さんに頼んでくれよ。恥ずかしくて出来ないって」
「いいでしょ、別にパジャマ取り替えろとか体の汗拭いてとかじゃないんだから」
この人なら言い出しかねない。
どうしよう・・・でもやらなかったら、ずっとねちねち言われそうな気がする。
ここですべきは逃げるより相手を満足させるため、要求をのむ事だ。
そう判断した俺はお粥をれんげで掬った。
母さん特製の卵と梅干し入りのお粥から湯気がのぼっている。
このまま食べたら火傷するかもなぁ・・・
「冷まして」
さもそれが当然、という風にお願いする姉ちゃん。

「・・・なんで？」
「見て分かるでしょ、食べるには熱すぎるの」

やっぱり、な。
そうすべきなのは分かってるけど・・・恥ずかしいよ。とってもね。
二十歳を越えた姉にご飯を食べさせるってのは、言葉では言い表わせない恥ずかしさがある。
まだ町内をパンツ一枚で走った方がましかもしれない。
どうしてもフーフーするのが嫌だったのだが、我慢して冷ましてやった。

「・・・ぬるすぎ」

口に入れた瞬間ろくに噛まずにぬかす姉ちゃん。
自分で食えと言いそうになったが、病人相手に・・・いや、それ以前に、回復した後に3倍返しにされるのが怖いからやめた。
文句を言ったわりに完食した姉ちゃんは、満足そうにお腹をさすっていた。

「ふぅ、美味しかった」
「これだけ食えるなら明日は大丈夫だな」
「当たり前でしょ。穴を開ける訳にはいかないから」

俺だったら、もしかしたらあともう1日学校をさぼりたい、なんて思うかもしれない。
まだ学生だった頃の姉ちゃんもそうだったはずだ。
・・・少しは大人としての意識が出てきたのかな。

「巽、おでこ借りるよ」
「は？ちょ、ちょっと？！」

いきなり額をくっつけてきた姉ちゃんに驚く。
おっ俺達は姉弟だぞ?!やめろって!
姉ちゃんは目を閉じたまましばらく止まっていたが、やがておでこを離した。

「・・・やっぱ自分じゃ分かんないか。どうだった?おでこ熱かった?」
「わ、分かんない」
「もう、ちゃんと測れよ。しょうがない奴だな」

姉ちゃん・・・いい加減弟を振り回すのはやめてくれよな。

〜〜続く〜〜

１０・蒼太も風邪をひく

一難去ってまたなんとやら、姉ちゃんが治ったと思ったら今度は・・・

「兄貴、大丈夫か？今日は無理しない方がいいんじゃないかな」

「あんまり休みたくないんだよ。単位は落とせないからな」

真面目な兄貴は昔から休むという事を知らない。

遅刻すらした事が無く、それをやるのは悪いんだと思っていそうな気がする。

「大丈夫だって、たまには休んでも罰は当たらないってば」

諸悪の根源、というか元凶の姉ちゃんはけたけた笑いながらのんびりコーヒーを啜っていた。

「姉ちゃん、なんだその言い草。誰のせいだよ」

「チゲ鍋」

悪怯れもしないで平然と言い放つ姉ちゃん。

お前なんか幼稚園からやり直せばいいのに。

帰りの車で隣同士だったからうつっちゃったんだろうか？

兄貴はそんなに体は弱くないんだけど、人並みくらいに病気を患う。

と言っても普通の人が年間で何回風邪をひくのかは分かんないけど。

「さあ、もう行かなきゃいけない時間だ。ご馳走様母さん」

「大丈夫なの蒼太？顔色悪いわよ」

「ちょっと寒気がするけど・・・歩けないって事は無い。だから・・

・」

立ち上がろうとした兄貴がふらついている。
通学なんて無理だろう、自力で歩行するのも難しいなら。

「兄貴・・・休めよ」
「嫌だな。その願いは残念だが聞けない」
「だからこそ、だ。無理したら明日はもっと酷くなるかもしれないんだぞ」
「・・・・・・・・・・」

兄貴は少し考えていたけど、パジャマに着替え始めた。
分かってくれたか、良かった。

「良く考えたらそうだな。休むのもあれだが、引き摺ってしまうのはもっと良くない」
「無理しないでね蒼太。紅音はもっと頑張った方がいいけど」

母さんの一言に姉ちゃんはばつが悪そうにコーヒーを啜っていた。
俺も同意見だな。
気を付けないと、もしかしたら俺やみどり、黄児も菌を吸い込んでるかもしれない。
今日は土曜日だから学校は昼までしか無い。

「待たせちゃったな」
「ううん・・・別に」

部活も無かったのでみどりと帰る事にした。
たまには友達と遊ばず、真っ直ぐ帰るってのも悪くないな。

「お兄ちゃん、ちょっと寄り道しない？」
「いいけど、何か用事か？」

こくん、とうなずくみどり。
たったこれだけのやりとりだけど何の為に寄り道するのか大体分かった。
兄貴想いの妹だな。

一緒に近くの薬局に寄ってアイスノンを購入した。
確か買い置きのは姉ちゃんが昨日使いきったから、家には無かったはずだ。

「風邪のときは冷やすのがいいんだよね」
「ああ。よく気付いたな、それが切れてたって」
「お兄ちゃんも気付いてたんだ。さすがだね」

・・・別に、誉める様な事なのか？
よく見てれば気付くと思うけど・・・・・・
うちの中では買い置きに対して無頓着な人が多いから、自然と気にする様になった。

使いたい時にシャンプーが無い、歯みがき粉が無い、そんなのを繰り返し経験してきたからかもしれないな。
兄貴も物の置き場は詳しいんだがそこまでは注意が及ばないらしい。

「ただいまー」
「・・・ただいま」

帰ると母さんは居なかった。
黄児もどうやらまだ帰ってきてないらしく、家の中は静かだった。

丁度お昼なのにどうしたんだろう、母さん。

「兄貴のとこに行くか」

「・・・うん」

買ってきたばかりのアイスノンを持ったまま、兄貴の部屋をノックした。

姉ちゃんと違って静かにしてやらないとな。

「入るよ、蒼太兄さん」

音を立てない様にゆっくりドアを開けて中に入った。

「・・・巽、みどり、学校はもう終わりか？」

「今日土曜日だぜ兄貴」

「そっか、高校は昼までだったか」

「はい、これ」

みどりは袋から買ってきたアイスノンを取り出した。

「ありがとう、ちょうど欲しかったところだ」

やっぱり切らしてたか。

気付いて良かった。濡らしたタオルでもいいけど、もっとちゃんと冷やした方が効くからな。

「具合はどうだ？」

「寝てたから少し熱が下がったよ。まだ目眩はするけどな」

「もっと寝ないとダメだよ、蒼太兄さん」

「そうだな。でも、さぼってると思うとあんまり寝られなくってね」

真面目だな、兄貴は。
姉ちゃんはもちろんだけど俺も少しは見習わないといけないか。
でもたまには休んでもいいと思うぜ。
兄貴は昔から俺の知る限り毎日机に向かって勉強してたし、部活も休まず出ていた。
酒を飲むとまるで別人みたいな人格が憑依するのを覗いては、欠点が無い。

父さんも母さんもきっと自慢の息子だろうな。

でもずっと頑張ってたらさすがにいつかはガタが来る。
今日くらいはゆっくりしたって罰は当たらないさ。
ましていつも見てない所でも頑張ってる兄貴なら、人よりも疲れるんだし。

「・・・どう？」
「気持ちいいよ、ありがとうみどり」

・・・お、照れてる。
あんまり表情には出ないが、みどりはいつも兄貴に誉めてもらうと嬉しそうだな。
風邪をうつされたのは災難だったけど、俺はそこまでついてないとは思わない。
きっと日頃の疲れが溜まってたんだろう。

〜〜〜〜〜

母さんの作ったお粥を食べた後、兄貴はまた眠りについた。
そして夕方、姉ちゃんが帰ってきた。

「ただいまー」
「よう、諸悪の根源」
「あん？誰に向かってそんな口をきくのだ」
「兄貴に風邪うつして自分はさっさと楽になった邪悪なお姉様に喋っている」

姉ちゃんはコートを脱いで椅子の背もたれにかけた。
ハンガーじゃなくそこに置いたって事は、また遊びに行くつもりだな。

かと思ったらポケットから何やら取り出した。

「なんだそれ？」
「・・・爆竹、風邪にはショック療法よ」

つまらない冗談だが中身が何かは大きさで大体分かった。
・・・姉ちゃんも気付いてたんだ、買い置きが無い事。

責任っていうか、罪悪感みたいなものはちゃんとあるんだな。
まあ当然っちゃ当然だけど・・・・・
次は気を付けろよ。

〜〜続く〜〜

11・黄児は風の子

「うわぁ～～・・・」

寒いけど思い切って空気を入れ替えようと窓を開けたら、真っ白だった。
屋根も道路もポストも、白い雪が降り積もっている。
昨日の夜は晴れてたのにいったいいつ降ったんだろう？
雪国で育った父さんはこんなの積もったうちに入らない、なんて言うだろうな。

「・・・すごい・・・」

自分で口にしといて何が凄いのかは分からない。
でも、こんなに積もったのを見たのは久々だったから、ちょっと嬉しかった。
特に用事も無いけど外に出たくなり、パジャマのままドアを開けた。

「あっ、たつにぃ！！おはよーっ！！」

いたいた。
うちで一番風邪とは無縁な元気の塊が。
いつから起きていたのか、既に雪だるまを一体完成させている。

「黄児、早起きだな」
「どうだたつにぃ、おれの作った雪だるま！！」
「・・・凄いな」

お世辞じゃなくて本当に凄い。

1人で俺とそんなに代わらない背丈の雪だるまを作るなんて、なかなか出来る事じゃないからな。

「でも、もう飽きちゃった。ただ転がすだけじゃつまんない」

半袖で鼻やほっぺを真っ赤にしている。とてもじゃないが俺には真似できない格好だ。

「たつにぃ！！雪合戦しようぜ！！」

「待てよ、こんな格好で・・・うぷっ？！」

いきなり顔面を雪のつぶてで狙われた。

まったく、子供ってのは容赦無いよな。こっちの返事も聞かずに遊び始めるんだから。

「どんどんいくぞたつにぃ！！」

「おい黄児、ちょっと待てって。だから、やめろ・・・」

痛がるふりをしつつ蹲り、足元の雪を掻き集めて玉を作る。

調子に乗って近付いてくるのを見計らい、複数を一気に投げ返した。

「うわぁああ？！いたたた、やったなたつにぃ！！」

「投げるのはひとつだけとは限らないぜ、油断したな」

「この、おかえししてやるっ！！」

痛いし、冷たいし、楽な遊びでは無いけど・・・

楽しいな。シンプルだけどそれがいい。ドッジボールに夢中になったあの時の気持ちを思い出す。

パジャマがびしょ濡れになったので、厚着してからもう一度遊ぶ事にした。

黄児は着替えたくないとごねていたが、やっぱり母さんには勝てず黄色いジャージに着替える。

「よーし今度は負けないぞ！！」
「なあ黄児、雪合戦もいいけどさ、あれ作らないか？」
「え？あれ？」
「そうだ。これだけ降ったら作れそうだからな」

敢えて何を作るのか、その物の名前は伏せた。
まあ途中で気付くとは思うけど、楽しみは後に取っておいた方がいいからな。

庭にたっぷり降り積もった雪を、スコップを使って集めていく。

「また雪だるま作るの？」
「いや、違う。まあすぐに分かるさ」

俺よりも早いペースで雪を掘っていく黄児。
小学生なのに力が強いからな。ちょっと加減を知らないのが玉に瑕だけど・・・

庭の真ん中にちょっとした大きさの丘を積み上げた。
さあ、ここからが本番だ。慎重にいかないと失敗するからな。

「次は真ん中に穴を掘るんだ」
「はーい！！穴堀り！！」

スコップではなく手を使っている。手袋もしないでよく出来るな。
尊敬するぜ。
黄児は寒さに本当に強いな。羨ましいぜ。

丘の中をほじくる様に雪を出しながら穴を開けていく。
天井が崩れない様に手で少しずつ固めながら、慎重に作業を進めた。

「たつにぃ！！もしかしてかまくら作るの？！」
「よく気付いたな、その通りだよ」
「やったぁ！！みんな入れる大きさにしようぜ！！」
「ん～ちょっと雪が足りないかな。沢山降ったとはいえここは雪国じゃないから」
「そっかー。でもたつにぃとおれは入れそうだな！！」

ちっちゃい時もこうして作った事があったな。
見よう見真似というか詳しい作り方は知らないので、すぐ崩れないか心配だな。
やっとかまくらが完成した時には、黄児みたいに俺も鼻や耳が真っ赤になっていた。

「出来たー！！」
「意外と形になってるんじゃないか？」

これなら2人くらいは余裕で入れそうだ。
雪にあまり縁の無い俺にとっては、雪だるまよりもレアで好きだ。
早速中に入り、黄児と向かい合って座った。
最初のうちは天井や中を見回していたが、すぐに飽きてしまったらしく・・・

「雪合戦やろうぜたつにぃ」
「急がなくてもいいだろ。せっかく完成したんだし、もう少し鑑賞しても・・・・・・」
「早くやろうぜ！次も負けないからな！」

「おいおい、負けてないぞ俺は。さっきは引き分けだろどう考えても」
「連勝するぞ！！一番強いのはこのおれだからな！！」
喜んだのも束の間、黄児はもう臨戦態勢に入っている。
やれやれ、兄貴の気持ちなんてやっぱり弟には伝わらないものなのかな。
どうしてそう戦うのが好きなんだ。困った奴だ。
ならば、これならどういう反応をするかな。
「ここで朝飯食わないか」
「・・・・・・！！」
ほら、うまくいった。
目の色が変わったぞ。飯の力は偉大だ、黄児には特にな。
2人揃ってかまくらで食事したいと母さんに言ったら、早速作ってくれた。
小さく切ったフランスパンにレタスやベーコン、トマトを挟んだサンドイッチを一緒に頬張る。
「うまいなたつにぃ！！」
「ああ、たまにはこういう所で食うのもいいだろ」
こういうまったりした朝もいいよな。
雪合戦はちょっとハードで、落ち着けないから・・・
黄児くらい元気が有り余ってるならいいんだけど、かまくらの中でのんびりするのも悪くない。
しかし、黄児は一緒にいて疲れるが、こっちも元気を貰えるな。
・・・ん？矛盾してるかな、言ってること。

「ごちそうさまでした！！」
「旨かったな」
「じゃあ行くぞ、はらごしらえは終わった！！」

やっぱりそうなっちゃうのかい、弟よ。
・・・本気なんだな、分かった。そのつもりなら俺も全力でいかせてもらう！

「いくぞたつにぃ！！おれの本気を見せてやる！！」
「奇遇だな。俺もそう思ってたところだ」

いつかまた、一緒にかまくら作ろうな。
今日はこれから雪合戦だけど・・・遠慮しないぞ。

〜〜続く〜〜

12・みどりは風邪の子

「寒い寒い寒い寒い！！」
「寒い！！寒い！！寒い！！」

雪合戦に夢中になり、俺と黄児は仲良くずぶ濡れになりながら家に駆け込んだ。

「どうしたの2人とも・・・あらあら、水溜まりで転んだの？」
「雪合戦してて・・・母さん、風呂湧いてない？」
「朝に湧いてる訳無いでしょう。でもシャワーは出るわね、風邪ひくといけないから早く入りなさい」
「「は～い！！」」

いやいや、恥ずかしい。
黄児と遊んでいて気が付いたらこんなんだ、ああ寒い。
競う様に着ているものを次々とキャストしてからオフしていく。
あれはスイッチ、っていうかレバーひとつで出来るから楽だな。
シャワーはお湯が出るけどやっぱり熱い浴槽に浸かりたい。
触ったら意外とあったかいので、湧かさずにそのまま飛び込んだ。

「ああー寒かった。たつにぃ、手カチカチだぞ」
「おわっ、お前の手熱いな。いいな、羨ましい」
「まあな！！おれ、カラダにエネルギーたくわえてるから！！」

自慢気に盛り上がった腹を叩く黄児に、思わず笑ってしまった。
触られるのは嫌がるくせに、自身の体型は誇らしいのか。

黄児が一緒だからぬるいどころかかなり熱い。

男同士で風呂に入るのは普通に考えたら恥ずかしい行為だけど、相手が小学生の弟なら別に変な感覚は無い。

「お前はこれからも風邪にはならないな」

「おうっ！！おれは強くなりたいからな、風邪なんかひいたら弱くなる！！」

ヒーローならば体が丈夫じゃなくちゃならない、これが黄児なりの哲学なのだ。

病気も避けて通りそうな眩しい太陽だからな。

きっと、何もしなくても強運や大切なものを引き寄せられる強烈なオーラを持っているに違いない。

「もう出ようか、十分あったまったぞ」

「そうだな！！今度は家の中で遊ぼうぜたつにぃ！！」

あれだけ雪合戦しといてまだ遊びたいのか？

まあ、いっか。今日は日曜日だしな。

すっかりあったまってしまい、パンツ一枚でリビングに向かう。

「・・・・・・おはよ」

「お、おう、起きてたのか」

「うん・・・」

みどりのやつ、何だか元気が無いな。

元から白い顔が青ざめててあまり良くない色になってる・・・

「お前、もしかして」

「・・・昨日から寒気してて、起きたら風邪ひいてた」

きっと伝染だな。
多分兄貴の風邪をもらったんだろう。
一緒に部屋に入ったのになんで俺は平気なんだ・・・？

「やめてよ、2人してそんな格好。見てると寒気するし、みっともないよ」

なんだかみどりに言われると妙に恥ずかしい。
面白がってはしゃごうとしている黄児を宥め、半ば無理矢理服を着せた。
いくら妹とはいえ病人の前でふざけるのは良くない。

「大丈夫か？」
「ちょっとぼーっとするだけ。そんなに・・・お兄ちゃんは平気なの？」
「ん、まあな。今のところは特に」

みどりは錠剤を口に含み、コップで飲み下した。
これで3人目か・・・もう2度と姉ちゃんに辛いものは食わせない様にしよう。
いや、それは別に自由なんだけど挑戦するなら1人でやってほしいよな。
みんなに風邪をばらまくなんて、まるで歩く生物兵器みたいな人だ。

「後で見舞いに行くよ」
「・・・柏餅持ってきてね」
「食えるのか？」
「治ったら食べる」
「一緒に食べようぜみどねぇ！！」

具合は悪そうだが姉ちゃんや兄貴よりはまだ軽そうだな。
しかし、黄児はともかく俺はまだ無事とは・・・意外に風邪には強いのだろうか？

「おれもお見舞いしたい！！」
「いいけど騒ぐなよ。お前はとにかく声が響くからな」
「大丈夫、あんまり騒がないようにする！！」

こいつの騒がない、はあてにならないんだよなぁ。
なんせあの姉ちゃんに張るくらい落ち着きが無いから、平気で暴れ回りそうだ。
でも心配してるみたいだし、信じてやってもいいか。
いくら小学生とはいえもう高学年だし、それくらいの分別はつくだろうな。
「じゃあ行こうぜたつにぃ！！」
「えっ、まだ早いだろ。それに遊びたいんじゃないのか？」
「みどねぇのお見舞いしてから！！」
「お、おいおい」

遊びに行くんじゃないんだぞ、そんなに走るな。
黄児はノックする事もなくみどりの部屋に入った。

「みどねぇ、もうなおったか？！」
「大声出すなよ黄児。みどりは病人なんだぞ」
「大丈夫・・・ふふっ、黄児はいつも元気だね」
「先生にもほめられてるぞ！！いつも元気だよねって！！」

俺の話を聞いてるのか？
全く声量を下げようとしない黄児に呆れてしまう。
さっき注意したばっかりなのに、あの返事はなんだったんだよ？

「・・・あれは？」
「あれってなんだ」
「柏餅・・・・・・」
「そんなのあるわけ無いだろ。本気で言ってたのか？」
「半分は冗談」

なるほど、みどりなりの冗談だったのか。
そんな冗談が言えるならすぐに治りそうだな、良かった。

「ねえお兄ちゃん・・・」
「どうした」
「・・・お兄ちゃんは、風邪ひかないでね。あんまりここに居なくてもいいよ」
「なんだよ、邪魔か？」
「・・・・・・うん」

これも冗談だと思うけど、みどりが言うと本気に聞こえるな。
普段あまりふざけないからだろうか？

「心配するな、長居はしないさ。もうちょっとだけいるよ」

心なしか顔色もついさっきより良くなってきた気がする。
みどりとは歳も近くて静かなので、一緒にいると落ち着くのだ。

「みどねぇの部屋って緑色だらけだな！！森の中みたい！！」

黄児が太陽だとしたら、みどりは月みたいに静かな雰囲気だな。
好きな色も落ち着いた緑色だし、とにかくみどりは安らぐ。
姉ちゃんがあんなだからこそ余計にそうなのかもしれない。

早く良くなってほしいな。
また明日から一緒に学校行こうぜ、みどり。

「寝れないのか？じゃ羊数えてやる」
「・・・お兄ちゃんが数えたら意味ないでしょ」

最近つっこむ様になってきたな。
嬉しいぞ、別に面白くないけど・・・

～続く～

13・巽も、風邪の子

こ、今回もまた私が語り手を勤めちゃいます。
進藤みどりです、こういう形では2度目ですよね。

まだうまく話せませんけどよろしくお願いします・・・
お姉ちゃんから始まって蒼太兄さん、そして私と次々に寄生してきた風邪なんですが、遂にお兄ちゃんにも伝染してしまいました。

風邪ひかないでね、って忠告したのに・・・・・・
なので週の始まりからいきなり学校を休んでしまいました。
今朝は黄児と2人きりの登校です。

「みどねぇ風邪大丈夫か?!」
「もう治ったよ、でもお兄ちゃんが・・・」
「なんでたつにぃだけ風邪ひいたんだろうな?おれも一緒にお見舞いしたのに」
「さあね。黄児の体にも一応ウイルスは入り込んだんじゃない?でも弱くて負けたとか」

不思議でしょうがないです。
お兄ちゃんはお姉ちゃんも蒼太兄さんもお見舞いしたらしいので、風邪をひいても仕方ないとは思いますけど・・・
黄児の鉄壁のセキュリティにはいつも驚かされてしまいます。
そう考えるとお姉ちゃんの体内の警備はザルもいいところですね、はい。

「ちゃんとお見舞いしてやろうぜ、みどねぇ!!」
「そうね。してもらったら嬉しいから」

とっても恥ずかしいというか、正直いうとお兄ちゃんにお見舞いしてもらうのは照れます。
でも、悪くない気分です。ちょっと恥ずかしいくらいの方がいいんでしょうね。
家族は仲が悪いより良い方がいいに決まってるし・・・・・・

それに、してもらったんだからちゃんと返してあげないと。

「おれ、たつにぃとゲームするんだ！！」
「黄児・・・お兄ちゃんにそんな元気残ってるかな？」
「そっか、無理か。だったら一緒にトレーニングする！！」
「いや、だから、風邪ひいてるんだよ。それも無理」
「だったらお風呂入る！！」
「・・・ねえ黄児、お見舞いの意味分かる？」

すると黄児は満面の笑みでうん、と頷いた。
そうなの、分かってるんだね。悪気は無いんだよね、黄児は無邪気だから。
・・・大丈夫かなぁ。
この間アイスノンを買いましたがもう無くなってしまいました。
お姉ちゃんも買ってきてくれてたんですが、立て続けに私達が倒れたので使い捨て状態です。

「みどねぇー！！こっちこっちー！！」

駅で待ち合わせしていた黄児と会い、近くの薬局に行きました。

「・・・上着は？」
「暑いから脱いだ！！」

ランドセルからはみ出しているパーカーを見せながら、黄児は笑っています。

「ダメだよ、ちゃんとした格好しないと」
「平気だよ、風邪なんかやっつけてやるからさ！！」

・・・風邪というのは本当に侮れません。
そもそもの原因はお姉ちゃんなんですけど、伝染し続けて私達兄弟をほぼ全滅させたのですから・・・
だから、黄児もきっといつかは風邪に倒れるでしょう。
でもそれを言うと絶対に負けないから、と引き下がろうとしません。
なのでもうあまりうるさく言うのは止めてしまいました。

「早く買おうぜアイス！！」
「・・・アイスノン、ね」
「わかった、そうそれ。アイス！！」
「・・・・・・・・・」

果たして何を分かったのでしょうか？
黄児は無邪気なのか天然なのか、人の話をちゃんと聞かないのかよく分からなくなる時が最近よくあります。
きっとお姉ちゃんに可愛がられてるせいじゃないかと・・・
飼い主に似る、なんていう言い方がありますから。

「探してくる！！」
「ちょっと、そっちは違う・・・黄児、待って」

やっぱり人の話を聞こうとしません。まるで違うコーナーの方に走っていきました。

仕方ないので、目的の品を手に取ってから追い掛けると、既にカゴいっぱいにお菓子を入れています。

「買って！！」
「ダメ。もうすぐご飯でしょう？」
「大丈夫、ご飯は別腹！！」
「その言葉誰に教わったの。お姉ちゃんでしょ」
「うん！！」

高校生の私のお小遣いでは、黄児のおねだりを聞いてあげるには少々厳しいです。
黄色い箱のこれはダイエット食品ですけど、こんなに沢山食べたら脂肪になってしまいます。
それ以上もう蓄えなくてもいいのに。
家に帰って、早速買ってきたばかりのアイスノンをお兄ちゃんに渡しました。

「・・・悪いな、みどり」
「昨日やってもらったから」
「たつにぃ！！ゲームしようぜ！！」
「黄児・・・いけないって言ったよね？」
「はは・・・そうだな、具合が良くなってからな」

自分も辛いだろうに、お兄ちゃんは黄児と遊ぶ約束を交わしました。
本当に・・・・・・優しい。
私だったら断っちゃうと思う。さすがに勘弁して、と余計な一言も加えてしまうはず。

「じゃあいつ治るんだよ？！つまんないぞ！！」
「黄児・・・あんまり怒鳴らないで。風邪ひいてると辛いの」

「あ、そっか。ごめんなたつにぃ、うるさかった」
「ああ、すげえうるさいな。ボリューム下げろ」
「こら、触るなよ！！」

黄児のお腹をつまむお兄ちゃん。
怒ってるのかな、と思ったけど顔を見たら笑ってたので、多分ふざけてるみたいです。
黄児は基本的に誰でも懐きますけど、特にお姉ちゃんとお兄ちゃんには懐いてるみたいで・・・

「なあ、みどり。お前はもう大丈夫なのか？」
「うん・・・もう熱は下がったから、多分大丈夫」
「無理しなくていいぞ。病み上がりは危険らしいからな。せっかく治っても、また風邪ひいたらつまんないぞ」

自分も苦しいだろうに、私の心配をしているお兄ちゃん。
嬉しいよ、そういうの。でも・・・たまには、というかこういう時くらいは、自分の心配してあげて。

「気を付けるから・・・・・・それより、言うことがあるでしょう？」
「なんだよ」
「・・・・・・優しくて、しかも、可愛い妹に、ありがとうの言葉」
「・・・慣れない事言うもんじゃねえぞ。ぎこちなさすぎ」
「うるさい、早く言えば～」

・・・いいじゃない、普段は無口な妹が冗談言ってもさ・・・
明日からまた一緒に学校行きたいな。
早く良くなります様に。

〜続く〜

１４・輝子、風邪の母

兄弟を襲った風邪は、俺から出た後に姿を消した―
かと思ったら一番最後にとんでもない相手に伝染していたのだ。

「大丈夫か？母さん」
「うん、ちょっと苦しいけど・・・明日には治るわ」

新聞取りのヤクザですら簡単にひねってしまう母さんですら、病気には勝てなかった。
起きたらもう倒れていたので、いつも忙しない朝が今日は十割増しで忙しい。

いやいや、朝はいいんだ。
パンや卵くらいは自分でも焼けるし、軽い物なら問題ない。
調理に時間がかかるだけでそれ程大したことはないんだよな。

「姉ちゃん焦げそうだぞ」
「火止めて！いま立て込んでて手が離せない！」

姉ちゃんは卵を焼きながら合間を縫って化粧していた。
今朝は寝坊したのでただでさえ時間が無い。だからいっぺんにやろうとする気持ちは分かるけど・・・・・・

「やばいもう行かなきゃ！」

少し焦げ目のついた卵をパンに乗せて、咥えながら慌ただしく出かけていった。
しかしこれでキッチンに静寂が訪れた訳じゃない―

「えっと・・・卵って何分焼くんだっけ、蒼太兄さん」
「聞かれると意外に答えられないものだな」
「みどり、兄貴！のんびりしてる場合じゃない、蓋から煙が出てるぞ！」
「えっ？！」

慌てたみどりが蓋を開けたが、すでに焦げた卵がそこにあった。

「最初にフライパンを熱し過ぎたのが原因じゃないか？」
「あっ、そうかも・・・加熱して、それから入れた」
「早く代われよ、後がつかえてるんだけど」

そういえばみんな、殆ど料理しないもんな。
手伝いくらいはするけど、せいぜい具材を切ったり果物の皮を剥くくらいで、火を使うのはみんな母さんだから・・・
ここにいなくて初めて気付く、母さんの偉大さ。
大概はそつなくこなせる兄貴も料理は駄目だったか。

調理実習じゃ特に失敗した事は無いんだけど、先生がしっかり教えてくれたからだろうな。
・・・そういえば、姉ちゃんは出来ないのか？ラーメン屋で働いてるから出来そうだよな。
みどりと一緒に帰宅してすぐ母さんの具合を確認した。
朝よりは顔色が良くなっているけど、まだ辛そうだ。
夜も休んでた方がいいだろうな・・・

「朝みんなが学校行った後キッチン見たけど、凄かったわね」
「ん、まあ・・・あれでも片付けたつもりだけど・・・」
「・・・・・・・・・」

凄いというのは、多分充満した焦げ臭さだろうな。
姉ちゃん以外は仲良く卵、パンを焦がしたので、それらが重なった匂いは結構きつかった。
・・・ごめん、母さん。心配かけさせてしまって。

「大丈夫よ、少しなら起きられるから」
「いや、無理しないで。今日1日くらい我慢出来るさ」
「無理したら明日に響くよ・・・何とかするから」
「・・・そう？ありがとう。必要になったら呼んでね」

風邪はおそらく母さんが治ったら、この家から消えて無くなるだろう。
残るは父さんか黄児、我が進藤家の健康体二本柱だ。
間違いなくどっちかに体当たりして砕け散るだろうな。

父さんも昼間お見舞いに来たけど、母さんは仕事の心配ばかりしてたらしい。

「でも、風邪はやっぱり怖いわよね。紅音、蒼太、みどり、巽、そして私・・・ちょっと流行りすぎだけど」
「そうだな。まあ、人数多いからしょうがないのかも」
「・・・・・・・・・」

少々長かった風邪と俺達家族の戦いも、これで終わりか。

結果は7戦中2勝5敗、ぼろ負けだ。
どんな人でも流行りの病には勝てないよな。
うちの場合2つも勝ち星があるのが奇跡かもしれないけど・・・・・・

インフルエンザじゃ無かっただけ有難いかもしれない。
あれは風邪よりずっと始末が悪いからな・・・
母さんのアイスノンを取り替えてから、静かに部屋を出た。
「・・・早く良くなって欲しいね」
「ああ・・・まだ辛そうだったぜ、母さん」
元はといえば姉ちゃんが風邪をひいたのが始まりだよな。
遊ぶっていうか何かに挑戦するのは結構だけど、自分だけならさておき、周りを巻き込むのだけは良くない。
6時ちょっと前、その姉ちゃんが帰ってきた。
「ただいまー・・・ふう、やっぱり重いな」
ちょっと大きめの袋を持っている。
ふん、自分のせいで母さんが倒れたというのに、呑気に買い物かよ・・・
「おっ？なんだその目は巽」
「・・・・・・心当たりが無いのですか、お姉様」
「そういう態度を取るのかい。あっそう、じゃいらないんだ」
「・・・・・・何を？」
姉ちゃんは俺に袋を差し出してきた。
中を覗くと、パッケージに包まれた餃子が重ねられていた。
「凄い！これ、どこで？」
「うちの店で買ったの。作ってすぐ入れてもらったから、まだあっ

たかいと思うよ」

早速出そうとしたら袋を引っ込められた。

「いらないんでしょ、巽。欲しくてもやんないけど」

「・・・ごめんなさいー」

「感情がこもってない。それに語尾を伸ばすな」

「謝ったからくれよ。いいだろ姉ちゃん」

これで夕飯は何とかなる。

それだけにしてはやけに量が多いなと思ったが、多分明日の分も買ってきたんだろうな。

「あっ、みどり！」

「ふざけてないで、早く食べよう。みんなもうお腹空いてるんだから」

「へいへい、分かりました」

唇を尖らせながら、姉ちゃんは買ってきた餃子を広げる。

そういや、姉ちゃんの職場のもの食べるのって初めてだ。

なんか嫌だから来るなと言われてるけど、わざわざ行くつもりもないので未だに寄った事は無い。

母さんが作ったんじゃない料理が食卓に並ぶのは珍しいな。

たまにはいいか、こういう夕飯も。

「うまーい！！」

餃子は、一口が大きい黄児が食べてもまだ半分残っているくらい大きい。

「まあね。私が原因だし、これくらいはしないと」
「姉ちゃんが作ったのか？」
「・・・・・・うん」
「なるほど、違うんだな」
「うるさい！黙って食え！」

今日もうちは賑やかな食卓だ。
・・・でも、母さんがいないからちょっと寂しいな。
明日には良くなってます様に―

〜〜続く〜〜

１５・みどり、雨降り

友達と遊んでから帰ろうとしたちょうどその時、雨が降ってきた。
小雨だと思ったら瞬く間に勢いを増していき、僅か数分でバケツをひっくり返した様な強い雨に変わってしまった。

「こりゃあまずいな・・・」

家まで歩いて大体１０分くらいの場所にいたので、わざわざ傘を買うのも勿体ない距離だ。
急な雨はすぐに止む事も多いので、しばらく雨宿りする事に決めた。
朝見たら天気予報は１日晴れるって言ってたんだけど、やっぱりあてにならないな。
しかし参ったなぁ、何もこんな時に降り出さなくても・・・・・・

心の中でブツブツ文句を言いながら近くのコンビニに駆け込む。

「おっ・・・みどりか」
「お兄ちゃん・・・もしかして雨宿り？」
「まあな。傘もわりと高いし、できれば買いたくない。少し止むまで待ってようと思って。お前もか？」

するとみどりはこくん、と頷いた。
なるほどね、さすが妹。考える事は同じなのか。

雨はコンビニの窓ガラスを叩いている。
こりゃ・・・果たしてすぐに止むのかは分からないな。

早速、今日発売の漫画雑誌を手に取った。

目当ての漫画から読み始めて、一通り目を通す。
みどりはお菓子売場の方で棚を見ている。
さて、どれくらい時間が過ぎただろうか。
何気なく時計を見て雑誌に目を戻し、そしてもう一度時計を見てしまった。

「ウソだろ・・・？！まだ１０分も経ってないのか？！」

自分の中ではもう３０分は過ぎていたのに、どうしてだ。
テスト中はいくら時間があっても足りない。溶けていくスピードが授業中とは桁外れなんだが、それと同じだ。
仕方ないので普段は読まない青年誌を手にとってみた。
・・・・・・違う、この雰囲気、なんかちょっと嫌だ。
俺は努力して強敵に勝利し、そして友情を築く、直球の熱血がいいんだよ。
悪役が活躍しがちな雰囲気ってのはどうも苦手なんだよな。

重い気持ちで時計を見たら今度は5分も過ぎていなかった。
雨は、まだまだ強い。
「・・・・・・なに難しい顔してんの？」
「うわっ？！」

いきなり横からみどりに話し掛けられ、読んでいた雑誌を落としそうになってしまう。
家の外で気配を消すな、驚いたぞ・・・まったく。

「お前、いつからそこにいたんだよ」
「たった今・・・」

手にはちゃっかりいちご大福を持っている。

「それ買うのか？」

「うん。もう帰ろうよ、たぶんこのまま降り続けるから」

「もうちょっと待ってようぜ」

「傘なら買ってあげるけど・・・・・・」

「妹にそんな事してもらわなくてもいい」

妹に借りを作ってしまうのはなんだか恥ずかしかった。
なんで雨宿りをしたのか理由を話すんじゃなかったなぁ。
しょうがないか、雨はまだまだ弱くなりそうにないし。

「・・・・・しまった」

「どうかしたの？」

「財布持ってきてなかったんだ。さっき友達と遊んだのに、忘れてた」

「・・・・・・・・・」

やめてよみどり・・・
その、軽蔑する様な眼差し・・・・・・
姉ちゃんにやられるより傷付いちゃうんだよな、それ。

なんと情けない、そしてみっともない。
みどりに傘を買ってもらうなんて・・・・・・

「あれ？２つじゃないのか？」

「うん」

でもみどりはひとつしか買わなかった。

おいおい、お前は濡れて帰れってか？おとなしそうな顔して姉ちゃん以上の鬼畜だったのか。

コンビニから出るとみどりは早速傘を差した。
だが、動かずにその場に止まっている。

「帰らないのか、みどり」
「入って」
「は？」
「一緒に帰ろう、お兄ちゃん」

いやっ、いやいや、待ちなさい我が妹よ。
なんなの？それってなんなの？

何のつもりか分からないけどお前に萌えたりなんかしないからね、お兄ちゃんは。

「いこ。いつまでもここにいる訳にいかないでしょう」
「おっ、おい！」

みどりは俺の手をとり、半ば無理矢理傘の中に入れてきた。

ちょっと待てって・・・何この雰囲気？
ほのぼの系じゃなかったのかよ、これ。

どしゃ降りの中いつの間にか俺が傘をさしながら帰路につく。
肩が触れ合ってる・・・な、なんかイヤだな、この空気。

みどりの事は好きだよ。
妹として、な。異性としてなはずがないだろ！

・・・何考えてるのこの子。
わざわざ一緒に傘を差して帰りたがるなんて、このブランコめ！
間違えた、ブラコンだ。
「寒いね、お兄ちゃん」
みどりの言葉が白い息となって寒空に溶けていく。
その横顔に思わず見惚れていると、急にこっちを向いた。
「そ、そうだな。冬の雨は辛いな」
「・・・ふふっ。鼻真っ赤だよ、耳も」
そう言うみどりも同じ部分を真っ赤にしている。
「変な奴だな、お前」
「何が・・・・・？」
「だってさ、兄貴と一緒に傘差して帰りたがるなんて変わってるじゃないか」
「別におかしくないと思う。いつも時間があるなら一緒に帰ってるじゃない」
「ふぅーん・・・」
みどりにとっては特別な事じゃないのか、なるほど。
・・・俺が意識しすぎなのか？
「ねえ、覚えてる？小学生の時さ、水溜まりとか大好きだったよね」
「ああ・・・そうだな。俺に限らず、子供ってのは水が好きなんだろう」

そんな事を話しながら歩いてると、水溜まりを見つけた。

「・・・入ってみる？」
「理由は？」
「無いけど。でも懐かしいよね、水溜まり」
「お、おい！」

俺の返事も聞かずにみどりはつかつかとそれに近寄り、おもむろに踏み込んだ。

「あ・・・」
「うわっ？！」

意外に深くて水の量が多く、俺のズボンに跳ねた。

「何してんだよお前、冷たいだろ！」
「・・・・・・あは、失敗しちゃった」

そしてみどりのハイソックスにもかかってしまったので、仕方なくハンカチで拭いてやった。
時々こうやって意味の分からない事をするんだよなぁ・・・

「・・・・・・照れ隠しだもん・・・」
「なんか言ったか？」

ぶるぶる横に振る顔がやけに赤いのはなんでだ？
雨は・・・まだ止みそうに無い。

～続く～

16・輝子、暗闇を照らす

災難はこちらの都合もお構い無しに突然やってくる。
夕食後、みんなもう風呂に入ってそれぞれの部屋でくつろいでいた。
黄児が遊びに来たので一緒にゲームしていると・・・

「わっ？！」
「・・・・・・っ！」

いきなりテレビが消えて同時に部屋も真っ暗になってしまった。
どうやら停電になってしまったらしい。

「たつにぃどこだ？！どこにいる？！」
「俺はここだよ。ちょっと落ち着け黄児」

弟に冷静になるのを促しているが、実は俺も動揺している。
ついさっきまでゲームで洞窟の中を進んでいたのだが、本物もこれくらい前が見えないものなんだろうか？
見事な程の暗闇だが真っ暗ではなく、窓から微かに明かりが入ってくるので、ちゃんと隣にいる黄児の輪郭は分かる。

参ったな、きっとブレーカーが落ちたんだろう。
こういうのは誰かが直すのを待っているより、自分でやった方が早い。

「ちょっと待ってろ黄児、ブレーカー直してくる」
「嫌だよ、おれこわい。一緒に行っていいか？」
「すぐ済むからおとなしくしてろ。怖くないだろ」
「ヒーローでも暗闇は苦手なんだよ！！」

そして・・・結局、ついてきてしまった。
しょうがない奴だな。でも仕方ないか、暗闇が好きな人間なんてなかなかいないだろうな。
気にならないのは寝ている時か、かなり落ち込んでいる時くらいだろうし・・・・・・・

部屋を出て少し歩いたら何かにぶつかった。

「痛っ！」
「・・・ん、巽か？」
「兄貴？そこにいるのか」

黄児と同様、輪郭や雰囲気しか分からない。
服の色はおろか顔のパーツすらはっきり分からなかった。

「ああ、ブレーカーを直そうと思ってな」

考える事は同じか。
でも、兄貴がついてるなら安心だ。
俺達男衆は寄り添う様に、正確には兄貴についていく様にゆっくり階段を降りていく。
懐中電灯があれば便利なんだけど部屋には置いてなかった。
それは兄貴も同じで、微かな明かりを頼りに進んでいく。
「点かないな・・・」

リビングにあった懐中電灯で照らしながら兄貴がブレーカーを直した。
だが、電気は復旧しない。
もう一度下ろしてまた上げたが、やはり点かなかった。

「どう？蒼太。直りそう？」
「いや・・・駄目だ。何度かやってみたけど、なんともない」
「じゃあ近くの電柱に何かあったのかしらね」

母さんの言うとおりかもしれない。
確認の為に外を見てみたけど、近くの家も同じ様に停電してるみたいだ。

さて、どうしたものか。
取り敢えず復旧するまで待つしかないかな。

暗闇にも目が慣れてきたが、やっぱり互いに顔が見えない。

「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・・・」

リビングにいるのは父さん以外の家族全員。
父さんはこの時間はたまに仮眠を取る事があり、日付が変わる頃に起きて朝まで執筆するのだ。
無理矢理起こすのは可哀想だからやめておこう。

賑やかな姉ちゃんですらさっきから口数は少ない。

「みんな、黙ってたらもっと辛くなるわ。復旧するまでしりとりでもしましょうか」

かなり唐突な母さんの提案に戸惑う。
でも、姉ちゃんはそれに乗った。

「いいよ。黙ってるより喋った方が気が紛れるからね」
「じゃあ順番はどうする？私が最初で兄弟順にいきましょうか」
「それでいいよ、母さん」

兄貴も、やる気らしい。
なんだか少しずつ元気が出てきた気がする。
そりゃあ今も不安で仕方ないけど、いつまでもこうしてたらもっと仕方ない。

「じゃあ最初は、暗闇」
「おい母さん、停電なのにいきなりその言葉かよ！」
「巽、アウトー。しりとりだからツッコミは禁止」
「勝手にルールを作るな！」

姉ちゃん、悪乗りしてるな。
いつもだったら欝陶しいけど今はそれが心の支えだった。

「気を取り直して・・・最初は携帯電話」
「わ、か。じゃ和服！」
「蜘蛛の巣」
「すっ、す、酢豚！」
「・・・・・・太鼓」
「根性！！」

取り敢えず一巡した。
次はまた母さんからだな。
「占い」
「い、ね。イライラさせる真ん中の弟」
「それは俺の事か？！姉ちゃんふざけんなよ！」

「またつっこんだ、しかも蒼太に割り込んだ。次やったらキャメルクラッチだよ」
「だから勝手にルールを作んなっての！」
・・・さっきみたいに大人しい方が良かったんじゃないか？
いや、まず落ち着こう。つっこんだら負けなんだ。姉ちゃんの思うツボなのを理解しなくちゃならない。

「じゃあもう一度、いからね。イカの塩辛」
「ラッパ」
「ぱ・・・パンダ」
「・・・・・・ダチョウ」
「占い！」
「黄児、それさっき私が言ったわよ」
「あーそっかぁ！！」

顔は見えないけど母さんが笑っているのが分かる。
それにつられてか姉ちゃんや兄貴、みどりもさっきよりは笑う様になってきた。

もう一戦しようかと思ったその時、急に目の前が明るくなった。

「あら、復旧したみたいね」

時間にすれば僅か３０分程の出来事だったと思うが、電気の有り難みを思い知らされた。
こんなに眩しくてあったかいんだなぁ・・・・・・

「じゃあ寝るわ、おやすみ」
「しりとりはどうするんだよ姉ちゃん」

「母さんが復旧するまで、って言ったでしょ。だからもう寝るの・・・ふぁあ」
「それじゃ、俺も寝るか。おやすみ」
「・・・・・・私も」
「おれも・・・なんか、眠くなってきちゃった」

4人はさっさと部屋に戻ってしまった。
まったく、みんな電気の有り難みを分かってるのか？

「巽ももう寝なさい。明日も学校でしょう」
「ああ、そうだけど・・・」

寝るにはまだ早い時間だったけど、部屋に戻った方が良さそうだな。

「母さん、おやすみ」
「ええ。寝坊したら駄目よ」

・・・俺達が不安ながらも落ち着いてられたのは、母さんがしりとりをやってくれたからだな。
暗闇でも母さんがいたから怖くなかったんだ。
ありがとう、母さん。
風邪も早く治って良かったよな・・・・・・

～続く～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0460z/

進藤家の人々

2011年12月16日19時46分発行